

フロレンス・ナイチンゲール著『産院覚え書・序説』再考
—助産事業と助産師教育に対するナイチンゲール思想の原点—

Reconsideration of Florence Nightingale' s "Introductory Notes on Lying-in Institutions"
— The Origin of Her Philosophy of Midwifery Function and Education —

金井一薫
Hitoe KANAI

日本看護歴史学会誌

No.33 2020

研究報告

フロレンス・ナイチンゲール著 『産院覚え書・序説』再考

—助産事業と助産師教育に対するナイチンゲール思想の原点—

金井 一薫¹⁾

【要 旨】

フロレンス・ナイチンゲール(1820-1910)は、看護師訓練学校を開設した翌年の1861年に、キングス・カレッジ病院内に助産師訓練学校を開いた。開設後、しばらくは順調に経過したが、病棟に産褥熱が蔓延したために6年後の1867年に閉鎖になった。ナイチンゲールはその背景について調査し、助産についての自身の見解を1冊の本にまとめて発表した。

本論文は、F.ナイチンゲール著『Introductory Notes on Lying-in Institutions』(産院覚え書・序説)を研究対象とし、助産事業と助産師教育のあり方に対するナイチンゲールの見解を明らかにしたものである。

ナイチンゲールは、人の誕生の場面に寄り添うのは女性であるべきで、その女性たちは科学的知識と豊かな訓練を受けた専門家でなければならず、彼女らは正常異常を問わずにすべての事例に対処できる力量を備え、病院のみならず自宅分娩にも携わることができる専門職であると考えていた。この見解が助産に対するナイチンゲール思想の原点である。

女性の力を活用して国民の健康を創るという発想は、ナイチンゲール思想の根底にあるもので、看護師に次

いで助産師を専門職として育てることで、社会の古い慣習と体制に対峙し、新たな社会システムを構築しようとしたことが本書を通して考察できる。

キーワード：ナイチンゲール文献、産院覚え書・序説、助産師教育、助産思想

[Abstract]

Florence Nightingale (1820-1910) set up a training school for midwifery nurses in King's College Hospital in 1861, a year after she established the Nightingale training school for nurses. The school operation was favorable for a while after it was opened. However, the midwifery nurses school was closed because puerperal fever spread over the ward in 1867. Florence Nightingale investigated its background, and summarized her view on midwifery into a book titled "Introductory Notes on Lying-in Institutions" and then published it.

This paper focuses on one of Nightingale's own publication works "Introductory Notes on Lying-in Institutions" to clarify her view on ideal modern midwifery function and education. Nightingale's

1) 徳島文理大学大学院看護学研究科

advocacy is that women should attend the scene of human birth, and that these women have to be well-trained specialists with scientific knowledge, being able to deal with any normal or abnormal cases and to assist in delivery not only at hospital but also at home. This original view is the basics of Nightingale's philosophy of midwifery.

The book tells us that promoting citizens' health by empowering women is the embodiment of one of the bases of Nightingale's philosophy, and that Nightingale, confronting the old local customs and social conventions, attempted to institute a new social system through promoting the professional status of midwife to a highly-skilled specialist subsequent to having established that of nurse.

[Keywords]

- * Nightingale literature
- * Introductory Notes on Lying-in Institutions
- * Midwifery education
- * Philosophy of midwifery

序論

1. 研究の背景

1861年末、フロレンス・ナイチンゲール（1820～1910）は、ロンドンのキングス・カレッジ病院の産科病棟を整備し、併せて助産師訓練学校を設立した。彼女の助産師養成への思いは熱く、26歳～35歳までの信頼できる人柄の女性たちを地区の教区から選別して、当初は6カ月間の訓練を受けさせることで、病院あるいは自宅で分娩する女性たちに質の高い助産技術を提供できると考えたのだった。この発想は、前年（1860年）に設立したナイチンゲール看護師訓練学校にける彼

女の思いと同様に、長年温めていたものであり、自立を目指す女性たちのために、新たな職業としての“助産師”という専門職を確立する試みであった。

開設後、しばらくは順調に経過したが、病棟に産褥熱が蔓延したために、学校は1867年（正確な年月日は不明、諸説あり）に突如閉校となってしまった。6年という短い期間の訓練であった。ナイチンゲールは直ちにこの危機の背景について調べ始め、産院及び一般病院の産科病棟における産褥婦の死亡に関する国内外の数多くのデータを入手可能な限り収集して分析した。体調がすぐれない状態でありながら、サザランド博士（医師・衛生学の第一人者）の協力のもと、1871年になって一冊の本にまとめて世に出した。それが『Introductory Notes on Lying-in Institutions』¹⁾（産院覚え書・序説）である。

ナイチンゲールが執筆した印刷文献は、残存するものだけで150点以上存在する²⁾。そのうち47点が日本語に翻訳され、今日ではナイチンゲールの主要文献は無理なく日本語で読めるようになっている。結果として、我が国のナイチンゲール研究は1960年代から今日にかけて飛躍的に進んだ³⁾。

150点の著作のうち、全文が邦訳されている文献の中には、『〇〇覚え書』というタイトルが付くものが4点ある。それらは『看護覚え書』（Notes on Nursing）、『病院覚え書』（Notes on Hospitals）、『救貧覚え書』（A Note on Pauperism）⁴⁾、そして『産院覚え書・序説』（Introductory Notes on Lying-in Institutions）⁵⁾である。それらを《四大覚え書》と呼ぶことができる。その《四大覚え書》のうち前3文献は、いずれもナイチンゲール思想の本質を探るうえで貴重な資料となっている。『看護覚え書』は史上初の看護の定義が書かれた著作として、ナイチンゲール思想の根幹に位置するし、『病院覚え書』は健康な病

院のモデルを示しており、近代病院建築のあり方をリードした文献として価値が高い。また『救貧覚え書』は、ナイチンゲールの福祉思想を探る上で不可欠の文献である。本論文には近代福祉思想の重要なテーマである人間の“自立”と“自己実現”が謳われており、時代を先取るその思想は新鮮である。このように3点の『覚え書』は、いずれも近代保健医療福祉思想の礎としての立ち位置を確保している。それに比して『産院覚え書・序説』は、その思想の真髄については未知なるままである。

本研究においては、この事実に基づき『Introductory Notes on Lying-in Institutions』（産院覚え書・序説）に焦点をあて、本書から“人の誕生にかかわる”助産事業と助産師教育に関するナイチンゲールの主張や理念を引き出し、それをナイチンゲール思想の系譜の中に位置づけることとしたい。

（註：これ以降の論述に際しては、『Introductory Notes on Lying-in Institutions』（産院覚え書・序説）の表記を『産院覚え書・序説』として表す。）

2. 先行研究

1) 先行研究の概要

これまでになされた研究の動向を知るために文献検索を行なった。日本語検索は、キーワードを「ナイチンゲール著、産院覚え書」として検索した。また英文検索においては、キーワードを「F. Nightingale, Notes on Lying-in Institutions」として検索した。検索した情報源は以下である。

- (1) 医学中央雑誌 (1958年～2019年3月における38万件を対象)
- (2) CiNii (3) CINAHL (4) J-Stage
- (5) Medical Online (6) PubMed
- (7) ProQuest (8) Science Direct

(9) 国立国会図書館

結果、本書を活用して書かれた文献数はゼロであった。しかし日本看護協会・図書館で探索したところ、以下の2文献を見出すことができた。

①薄井坦子. (2000). ナイチンゲール研究学会第20回研究懇談会・パネルディスカッションーナイチンゲールのとった研究方法:『産院覚え書』にみるナイチンゲールの研究方法. ナイチンゲール研究, (6), 4-7.

②山岸仁美, 寺島久美, 阿部恵子. (2014). 『産院覚え書』におけるナイチンゲールの思考過程の特徴. ナイチンゲール研究, (12), 3-14.

さらに追加するならば、日本看護歴史学会第31回学術集会において、筆者が報告した記事として以下を挙げることができる。

③金井一薫. (2017). ナイチンゲール著『産院覚え書・序説』再考. 日本看護歴史学会第31回学術集会講演集, 60-61.

2) 先行研究の特徴と今後の研究課題

①②文献ともに〈ナイチンゲール研究学会〉で報告された内容である。

①において薄井は、「FNの研究手法の最もわかりやすい文献として『産院覚え書』をとりあげることとした」と述べ、『産院覚え書』の目次を示したうえで、論文刊行までの経過と内容紹介を行なっている。そして〈ナイチンゲールの認識の特徴〉について、「ナイチンゲールが直面した問題に対し、どのように頭脳を働かせていったか、取り組みの順に文中の言葉で内容を示し、主張の根拠とその性質を述べ、考察を加えている。続いて〈ナイチンゲールの認識の特徴〉が明らかにされた。ここまでの分析は『産院覚え書』の第1章（『産院覚え書』にはこの表記はない）部分が対象となっており、第2章の「産科施設および助産婦・

産科看護婦訓練学校の構造と管理」については追及されてはいない。

②において山岸らは、研究目的を次のように述べている。「『産院覚え書』(1871)をもとに、ナイチンゲールが看護上の問題発生状況において、《どのような観点から》《どのような事実に着目し》《どのように考察して改善への方向性を見出していくのか》、その思考過程の特徴を明らかにする。」そのための研究方法は、質的分析法を用いている。まず、「はじめに」から「第1章」までを研究対象範囲として、その中でテーマに関する重要センテンスを抜き書きし、それらを図示したうえで、意味内容をよみとり、〈問題解決に向かうナイチンゲールの認識〉を明らかにしている。ナイチンゲールの認識の特徴としては、「高い理念のもとに、徹底的に資料を集め、資料の限界をふまえつつ、複雑な看護現象に潜む論理を抽出して」いく思考のプロセスにあるとしている。

③において筆者は、『産院覚え書・序説』という著作が存在しているという事実に触れ、本著作がどのような特徴をもつものであるかについて、その概略を紹介した。

以上の先行研究から導き出される今後の研究課題として浮上するのは、第一に、文献①と②においては触れられていない『産院覚え書・序説』の「第2章」について探究する必要があること、第二に、第一の視点の延長上にナイチンゲールの助産思想(理念)について明らかにすること、さらに第三として、〈当時の医学界における感染に対する問題意識〉と〈ナイチンゲールの見解〉を比較することによって、ナイチンゲールの衛生思想の特徴を明らかにすることである。さらに、筆者が2017年当時に認識していた『産院覚え書・序説』への見解を再検討することにより、本文献へのより深めた解釈を試みることである。

I. 研究目的

フロレンス・ナイチンゲール著『Introductory Notes on Lying-in Institutions』(産院覚え書・序説)を再考し、本書全体の特徴を明確にすることで、助産事業と助産師教育に対するナイチンゲール思想の原点を明らかにすることが本研究の目的である。

II. 研究方法

フロレンス・ナイチンゲール著『Introductory Notes on Lying-in Institutions』(産院覚え書・序説)を主な研究対象とする文献研究である。

III. 倫理的配慮

資料はすべて公表された印刷文献を用い、その著作権に留意した。

IV. 『産院覚え書・序説』の特徴とナイチンゲールの見解

1. 「助産師訓練学校」設立をめぐる時代背景とナイチンゲールの志向

Monica E. Baly『Florence Nightingale and the Nursing Legacy』Chapter 4の記述を読むと、近代英国における助産事情が少し見えてくる。

以下は、ベイリーの記述の一部を筆者が翻訳したものである。

「17世紀の英国では、大半の普通分娩は女性の手によって行なわれていたが、彼女たちのなかには教育を受けた者もあり、また腕が良くて有名になった者もいた。しかしほとんどのお産は無知な女性たちによって行なわれており、かつそこには迷信がまかり通ってもいた。

1616年になると、助産師の組織は助産鉗子で名が馳せている一家のピーター・チェンバレン医師の助力を得て、助産師教育制度の創設や宗教に関係のない制度

を作るよう運動を起こし、時の王様に勅許状を求めて嘆願書を出した。しかしながらその嘆願書は外科医たちによる反対に遭い成就しなかった。彼らの中には、助産事業は儲かると考え始める者もいた。

18世紀になると、医師たちが儲けのために普通分娩を専門に手がけるようになり、助産に携わる女性たちは減退し、男性助産師(man-midwife)が出現し始めた。このことは助産婦に影響を与え、助産の仕事は魅力を失った。また助産事業は産業の振興や人口の増加に伴い、社会における緊急を要する課題となっていた。同時に、工業化の進展はそれまでの伝統的な家庭内労働の形態を変化させ、家庭から女性たちの仕事は奪われていった。女性たちは家庭に縛られ、たとえ美容師のような女性的な仕事であっても、それらは男性に引き渡されていったのである。

こうした社会情勢と風土の中で、19世紀になると高い教育を受け、家庭の外に出て仕事を持って生きる少数の女性たちが、看護や助産という分野の改革運動を打ち上げる原動力となった⁶⁾。

助産の担い手と女性たちをめぐる上記のような英国の状況を理解することは、ナイチンゲールの助産思想を知るうえで役に立つ。

次に、助産師養成開始時点におけるナイチンゲールの志向の特徴を見ていく。

「1861年末、ナイチンゲール基金出資の第二の試みとして助産師訓練学校が設立された。この計画は、ナイチンゲールがハーレイ街時代からずっと胸中に温めてきたものであった⁷⁾。」という記述が示すように、助産師を養成する計画は、クリミア従軍以前から抱いていたナイチンゲールの長年の懸案事項であったようだ。彼女は親しい友人であり、女流小説家でもあるハリエット・マーティーノに宛てて次のような手紙を書き送っている。「わが国を除いてほとんどの国にも、

助産師のための国立学校があります。この学校が、長年にわたって英国には欠けていた道を拓く端緒となると信じています⁸⁾。」

この時点で、ナイチンゲールはすでに「本来の助産師というものは困難事例を含むあらゆる事例に対処できるべきで、就業年限はヨーロッパ大陸と同様に、少なくとも2年以上でなければならないという考えを抱いていた⁹⁾。」このように助産師養成の青写真は、ナイチンゲールの内ではヨーロッパ大陸をモデルにして出来上がっていたようである。

2. 感染症をめぐる医師たちの見解とナイチンゲールの見解

第2項では、助産師訓練学校を閉鎖まで追い込んだ〈産褥熱〉に焦点をあて、この問題が当時の医学界でどのような扱いを受けていたのか、またそれに対するナイチンゲールの見解について探っていく。本テーマは、ナイチンゲール思想の本質を明らかにするうえで、重要な鍵となるものだからである。

産褥熱は、分娩24時間から産褥10日目以内に発症し、2日以上にわたる38℃以上の発熱や下腹部痛、悪臭をとともなう悪露、子宮収縮不良などの症状を呈する感染症である。産褥熱は、現代では明らかに感染症として認知されており、抗菌薬の治療で治癒するが、19世紀半ばにはまだ〈感染〉という概念と科学的根拠が衆知されておらず、治療の場である病院は不衛生な状態であった。そのような時代に、産褥熱は明らかに医療者の手指を通して、また病棟や病室の不潔な環境によって引き起こされたものであるという学説を打ち出したのは、ハンガリーの産科医イグナツ・ゼンメルワイス(1818~1865)である¹⁰⁾。彼は1850年代に産褥熱は接触感染であるとの見解を発表し、徹底した手洗いや器具の消毒を提案したが、当時の医学界の権威者

からは完全に否定された。なぜならこの説が正しければ、医師たちは皆、殺人者になってしまうからである。「当時は手術にしる病理解剖にしる、素手で行うのが常識で、医師には手を洗う習慣すらなかった¹¹⁾。」ので、ゼンメルワイスが学会で発表するやいなや、激しい反発にあった。彼の説を実践した病院では産褥熱の発生率が著しく減少したにも関わらず、「彼は大学を追い出され、産科学会から無視され、失意のうちに発狂し生涯を終える。享年47¹²⁾。」であった。病に苦しんでいたゼンメルワイスは、ルイ・パスツール（1822～1895）が1863年に発表した論文「腐敗の研究」については知るよしもなかったが、同世代に生きた外科開業医であったジョセフ・リスター（1827～1912）は、パスツールの論文に影響されて、石炭酸で微生物は消えるという発見をした。当初、学会はこの発表も無視したが、この状況を打破したのはロベルト・コッホ（1843～1910）であった。コッホは1877年に炭疽菌を発見し、病原菌の存在を誰の目にも見えるようにした。そのことによって、感染の実態が浮き彫りにされ、リスターの考えは認められることになった。「以後、消毒法、滅菌法、滅菌物の使用による感染予防は医学の常識となり、石炭酸は世界中の医療現場に必須のものとなった¹³⁾。」

一方、ナイチンゲールは〈細菌説〉ではなく、当時主流をなしていた〈瘴気説〉をとっていた。それは「彼女の協働者であったジョン・サザランド医師やウィリアム・ファー医師も同じ考えであり、感染症はすべて、瘴気が原因で発生し、瘴気はすべての感染症の原因であると考えていた¹⁴⁾。」

瘴気説をとっていたとはいえ、ナイチンゲールの感染に対する見解は明白であった。彼女は『看護覚え書』（1859）や『病院覚え書』（1863）執筆の頃にはすでに、「避けられない”感染”なるものは存在しない。感染は

空気を通して行われる。人間が呼吸をして空気が汚れると感染がおこる¹⁵⁾。」

「事例のどれをとってみても“感染”なるものは不可避なのではなく、ただ、ケアの不在と無知とからくる結果にすぎないということがすぐにわかる¹⁶⁾。」

「真の看護が感染ということの問題にするのは、ただ感染を予防するという点においてのみである。患者に絶えず注意を注ぎながら、清潔を保ち、開け放した窓から新鮮な空気を採り入れること、それが唯一の防御策であり、真の看護師はそれを人びとに求め、また自らもそれを守る¹⁷⁾。」

このようにナイチンゲールは感染を恐れず、感染をくい止める策を考えるべきだという一貫した信念をもっていた。このテーマは『産院覚え書・序説』にも貫かれている。

残念ながら、ナイチンゲールはゼンメルワイスとは面識がなかったし、彼の論文には目を通したこともなかったようである¹⁸⁾。もし同時代に生きた両者に接点があったならば、ナイチンゲールの持論は、空気感染説に加えて接触伝染説にも影響されて、その論調に変化があったかもしれない。一方、病院が抱えている種々の問題に関しては、概ね共通した認識を持っていた英国の産婦人科医であり、ヴィクトリア女王の侍医でもあったジェームス・シンプソンとは、文のやり取りをしていた。シンプソンは出産に麻酔剤としてのクロロホルムを初めて使用した人として知られている。

時が流れ、コッホがコレラ菌を突き止めると、「サザランド医師が、コレラ菌発見の重要性をナイチンゲールに伝えたことが、やがて彼女が瘴気説を捨てる決断につながった¹⁹⁾。」そして「1873年になると、彼女の看護学校でも細菌説と消毒実践を採り入れた教育が始められ、(略)1883年になって出版された論文には、種々の消毒剤や防腐剤の正確な用量や用法など、細かな助

言が記されている²⁰⁾。」このことから、ナイチンゲールには科学的根拠が明確な学説に対しては率直に認めるという側面があることがわかる。しかし、細菌説に納得はしても、彼女は新鮮な空気的重要性、部屋の清潔、栄養への気配り、適切な建物の構造、病人を病室に過密に詰め込まないこと、医療関係者の心構えなど、〈感染防止策〉の重要性については、生涯説き続けた。

ナイチンゲールが力説した〈感染防止〉という考え方は、現代にも通じる感染対策の基本的な視点であり、健康を守る看護の基軸となる思想である。

3. データを駆使して示したナイチンゲールの具体的提言と指摘

第3項においては、多くの具体的データを駆使して明らかにしたナイチンゲールの提言について述べていく。

ナイチンゲールは、『病院覚え書』(1863年・第3版)の中でもおびただしい数の図表を使って、理想とする具体的な病院構造を示しているが、『産院覚え書・序説』においても、数多くの図表(表は21枚、図は9枚ある)を作成し、産科分野の現状や助産に係る事実を基盤に据えて、自身が考えた産院構造や助産業務のあり方、また助産師教育の具体を明確にした。ここでは順を追って、ナイチンゲールが示した代表的な図表や統計表を紹介し、その意味するところを解明していく。

1) なぜ、助産師訓練学校を廃止せざるをえなかったのか

本書の「はじめに」の文章の中で、ナイチンゲールが実習病院であったキングス・カレッジ病院産科棟の6年間の死亡者について調査した結果、この病院では780人の妊婦が分娩し、26人が死亡していると述べている。死亡率は1000人中33.3人である。それゆえ「こ

の嘆かわしい状況では、この病棟が閉鎖されたのは当然のこと²¹⁾」と認めている。そして

「状況が変われば我々の助産師訓練学校を再開することが妥当かどうかについて、真摯な態度で検討してきた²²⁾」と述べており、この時点では学校再開の意志があったことが読み取れる。

2) 当時の英国およびヨーロッパ大陸全域における産婦の通常死亡率について

1867年の「戸籍登録所による第30回年報」によれば、英国では1年間に768,349件の出産があったが、そのうち3,933名の産婦が分娩中の事故や産褥性疾患がもとで死亡している。その死亡率は1,000人中5.1人で、死亡率0.5%である。この数値は、現在の先進工業国における死亡率が100万分の1単位であること²³⁾を考えると、いかに高い死亡率であるかがわかる。

さらに別の資料(出産後の対1,000人の死亡率“広報および報告書より抜粋”) ²⁴⁾では、1858年~1870年間にわたる出産後の死亡率を地域別、国別に表示している。当時は死亡率4%までが産科病棟の常識だった²⁵⁾。キングス・カレッジ病院産科棟の死亡率は3.3%だが、この表を見ると、1861年のパリの12病院における死亡率は9.5%である。英国国内に比べて、大陸での死亡率の高さは群を抜いている。

ナイチンゲールはヨーロッパ大陸の資料を見る時には、レオン・ル・フォール博士の資料²⁶⁾を全面的に参考にして、それを基に分析している。文中に「ル・フォール博士の『妊産婦について』の抜粋から」²⁷⁾と称した表を掲げているが、その表について「博士の資料は、ヨーロッパのほぼ全域にわたるさまざま国および風土のもとにある産院において、出産888,312件につき死亡は30,394件にものぼり、平均死亡率は1,000人につき34人であり、これはキングス・カレッジ病院

にわれわれが設けた助産師訓練学校を閉鎖においこんだ、かの死亡率を超える値であることを示している²⁸⁾。」と述べている。この記述によっても、当時のヨーロッパ大陸における妊産婦死亡率がいかに高かったかが理解できる。フォール博士の調査票は58の産院を対象としており、その調査年や調査年数にばらつきがあり、数値の信頼度は低い。しかし平均を出すにあたっての全数の多さがその欠点をカバーするものと思われる。結果としてこの数値は、当時のヨーロッパ大陸全域にわたる産婦の死亡実態の概略を把握するうえでは参考になる。

もう一点、〈家庭分娩による死亡率〉に目を向けてみよう。同じくフォール博士の表を参考にすれば、たとえそれが正確であるという保証がなくとも、1つの事実を見出すことができる。つまり、ヨーロッパ大陸全域における分娩数934,781件に対して死亡数は4,405

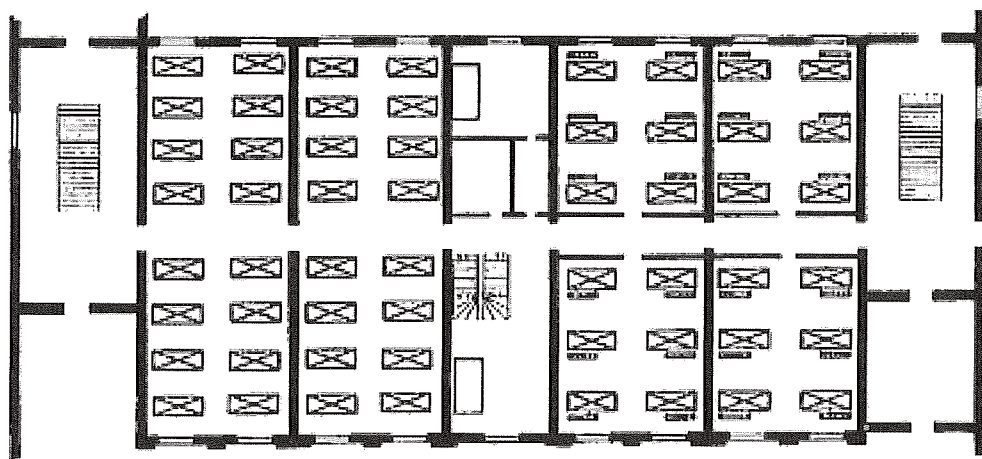
件で、死亡率は4.7人である²⁹⁾という結果が導き出されているのである。この数値は産院という施設での分娩による死亡率が34人であることをふまえれば、かなり低いのが特徴である。ナイチンゲールはこの点に着目し、大きな関心を寄せた。

3) 産院における死亡原因の究明とその対策について

(1) 産科病棟の構造が死亡率に及ぼす影響について

ナイチンゲールは、産褥婦の死亡率が、一般患者との雑居という事実のせいばかりでなく、建物の構造等に由来する例をいくつか挙げている。【図1】は死亡率が高かったパリの産院である。廊下を挟んで病室が並び、採光も換気も好ましくない環境にある。ナイチンゲールは、このように同じ屋根の下に多数の産褥婦が集められている密集した病棟構造を最も嫌った。

【図1】パリ診療院

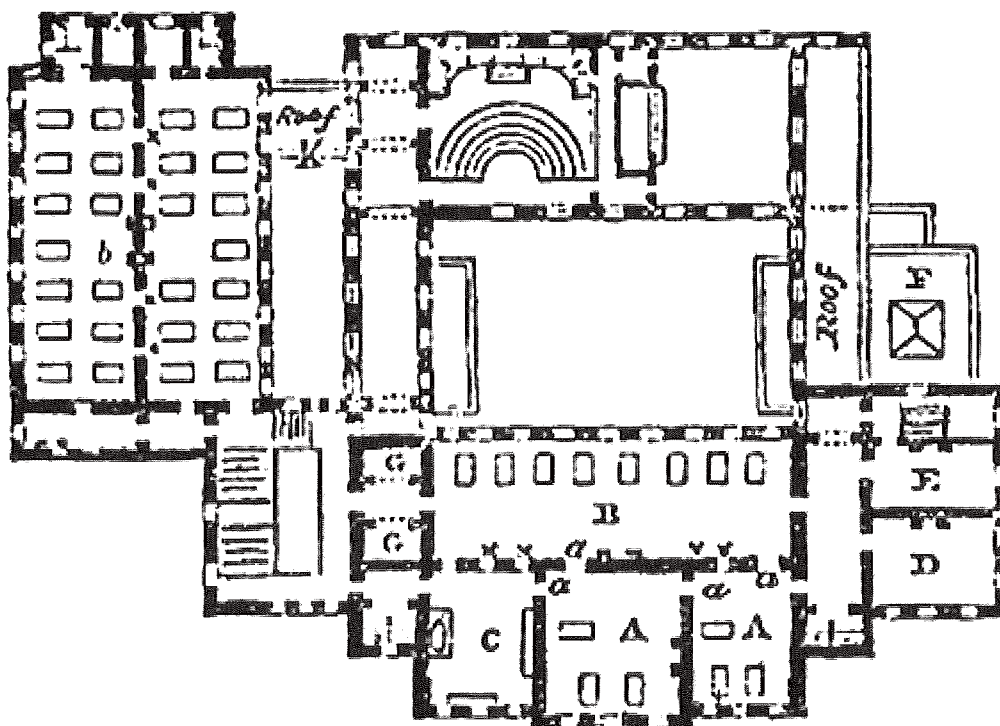


(Former arrangement of Lying-in Wards)

【出典】McDonald L. (2005) . Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution, Volume 8 of The Collected Works of Florence Nightingale. p.279. Wilfrid Laurier University Press.

次に、当初助産師教育のために用意されたキングス・カレッジ病院の産科病棟の構造を紹介し、ナイチンゲールの紹介文は、ナイチンゲールによる解説文に基づいている。ルが指摘する問題点を列記してみたい。下記【図2】

【図2】キングス・カレッジ病院の産科病棟・4階の平面図



- A：分娩室
- B：リカバリー室
- C：リネン、沐浴室
- D：特別室
- E：助産師控室
- F：検死所

【出典】McDonald L. (2005) . Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution, Volume 8 of The Collected Works of Florence Nightingale. p.282. Wilfrid Laurier University Press.

「この平面図をみると、分娩室と回復室および産科棟のその他の部分、すなわち講義室、死後解剖室などとの関係がよくわかる。この構造の重大な欠点は次のようである。すなわち、居室が背中あわせに並んでいくこと、これらの居室が病院の一般病室にきわめて接近していること、2組の居室に共通の大階段があること。この階段の大きさと解放性、そして各階に相対して設けられている窓は、換気が十分になされ、またそれぞれの区分を分断できることを示しているとはいえ、好ましくない。死後解剖室の位置も悪く、そこからの臭気が、各居室内ではっきりとそれとわかってしまうのである。すでに述べてきたごとく、助産師生徒は産科棟内に病院の他の部分から入室できたのである³⁰⁾。」

上記の解説を読むと、ナイチンゲールが指摘する病棟構造の欠点がよくわかる。図面が鮮明ではないが、これは1860年代の英国における産科病棟の構造を知るには貴重な資料である。

(2) 改善案が示す産科病棟の構造とその効果

ナイチンゲールは「私は、設計上多くの工夫が必要でありながら、今までそれがなされなかった建物として産科施設、とくに助産師訓練校が付設されている建物以上のものを知らない³¹⁾」と言っている。彼女が助産師訓練学校の閉鎖に伴って、本格的にその原因究明に乗り出した意図がここからもうかがえる。

その後、ナイチンゲールはいくつかの改善された産科病棟の例を挙げ、それらの建物内における死亡率との関連性について考察している。改善された建物は総じて一般病棟とは連結していない独立棟であり、その構造は常に新鮮な空気を十分に取り入れることができるようになっていくことが特徴である。またベッド数も少なく、一時に全部がふさがるといこともない。その結果は目に見える死亡率の現象という数値となって表われている。こうした変革が、ナイチンゲールの

直接の指摘によってなされたものであるのかどうかは定かではないが、産科領域にあっては、徐々に建物の構造上の変更が進んでいったようである。ここに設計案として出された【図3】を提示するが、この図面は明らかにナイチンゲールの理想を描いたものといえよう。

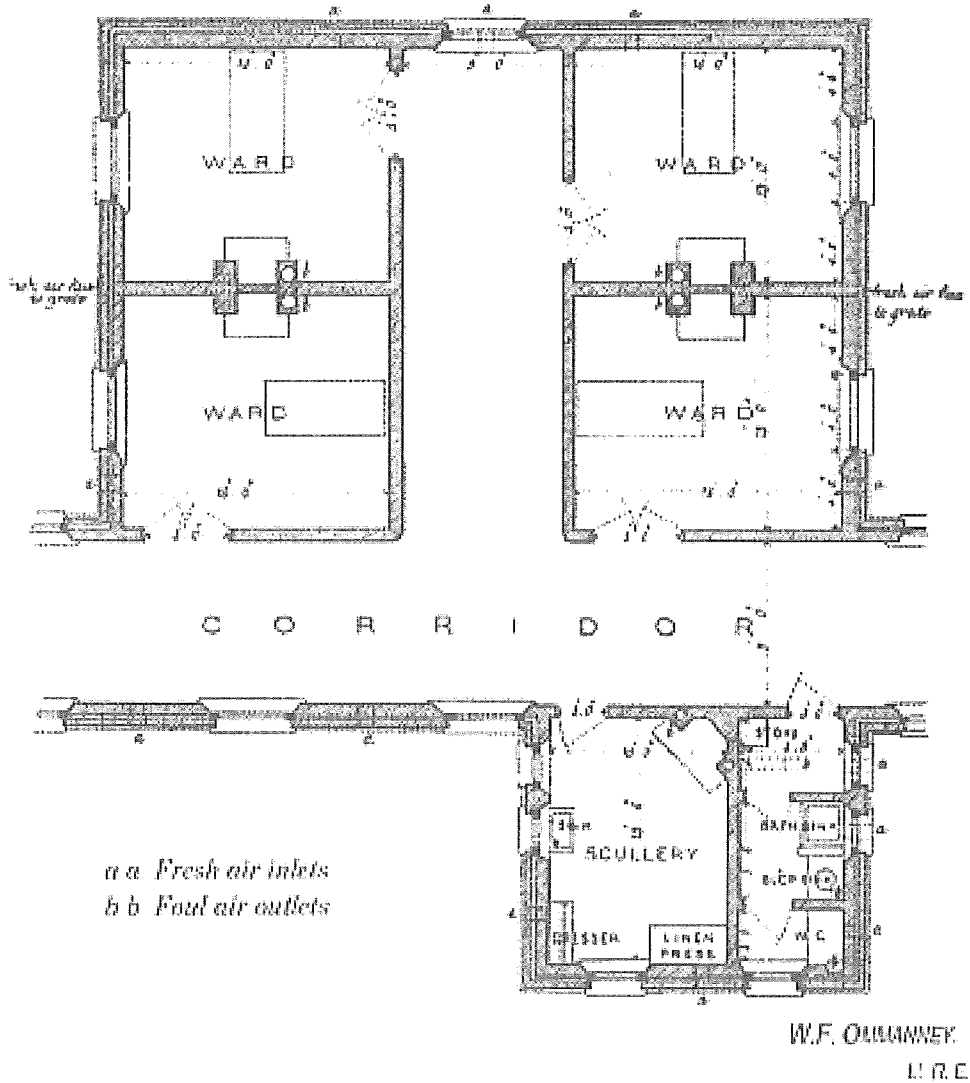
設計案は各病室がそれぞれに独立しており、個人の家庭のようになっている。そのため「各部屋は9フィートの廊下の両側に2つずつ配置されている。そして窓を設け、廊下のつきあたりにも窓を設けている。(略)この設計案では食器室や作業室は9フィートの廊下を隔てて居室とは反対側にあり、完全に独立している³²⁾。」こうした設計は、分娩小屋が持つ諸条件をクリアしている。家庭内分娩に見られるように小屋形式の分娩における死亡率はきわめて少ないということである。

ナイチンゲールは病棟構造の具体的提案と共に、分娩室や病室の管理の仕方、家具、寝具、リネンの扱い方、医師の部屋、待合室、厨房のあり方に至るまで、感染防止の観点から細かな注意点を書き残している。

4. 当時の「産科統計」の不備を指摘し、「事例記録書式」を考案

ナイチンゲールの時代、さまざまな統計的資料(有効な資料)を入手しようとした場合、その收拾は困難をきわめた。「その当時は死亡原因を記録するための統一用紙がありませんでしたし、また産褥熱による死亡の判定基準としての産後日数も定められていませんでした³³⁾。」これは統計表を作成するには決定的な欠陥となる。それゆえナイチンゲールは調査対象の母数が多い資料を参考にし、併せて「戸籍庁の報告書から得られた資料を最大限に活用して³⁴⁾」調査を進め、

【図3】設計案



【出典】McDonald L. (2005) . Florence Nightingale on Women ,Medicine, Midwifery and Prostitution, Volume 8 of The Collected Works of Florence Nightingale. p.322. Wilfrid Laurier University Press.

ある一定の見解を述べたのであった。その過程で明らかになったのは、例えば、「母親の年齢」「既婚・未婚」「妊娠回数」「前回の出産年月日」「妊娠期間」「分娩回数」「陣痛開始時間」「陣痛持続時間」「胎位」「児の生死」「児の性別」「在院日数」など、分娩記録に必要な事項

が完全に欠如していることであった。こうした項目が記載・記録されていないかぎり、正確な分娩実態は把握できないし、他施設や他国との比較も困難である。

そこでナイチンゲールは、自ら「産科事例の記録のための書式案」³⁵⁾を考案し、今後はこれをどの施設

においても使ってほしいと願った。この表には、上記欠落項目の他に「住所」「入院年月日」「陣痛開始日」「分娩の種類」「分娩合併症」「手術処置」「分娩後の事故（あれば）」「出産（一子・双子・三つ子）」「退院年月日」などの項目が盛り込まれており、現代においても十分に通用する内容となっている。

実は、ナイチンゲールはこれ以前に同様の提案を〈病院医療に関する標準統計の策定〉という形で表わしている。当時の英国の医療界には規格化された〈医療統計〉というものがない。とりわけ重要な〈病院統計〉において、入院患者情報として「病気の分類」「重症度の判断」「治療効果の判定」などについて、病院同士の間で規格化された記録様式が存在しなかったのである。入院期間なども把握されていない状況であった。ナイチンゲールはこうした欠陥を改善し、次の2点を提案した。①病気の種類に従って疾患名の標準的なリストの作成、②病院用の標準的な統計方式の設定。この内容は1860年夏に開かれた国際統計学会において「標準病院統計方式」として紹介されている³⁶⁾。その後、ナイチンゲールが提案した標準方式は多くの病院で採用され、1862年9月に発刊された『統計学会雑誌』にも掲載されるなど、病院統計の標準化というテーマはその後広く医療界に浸透していくことになるのである³⁷⁾。

1871年に発刊された『産院覚え書・序説』において、ナイチンゲールが産科記録様式の標準化を望んだことは、彼女の経験からみればごく自然の成り行きであったろう。

V. 助産師教育に対するナイチンゲールの理念

1. 必要とされた助産師養成と教育のレベル

『産院覚え書・序説』の「追補（教育のある婦人の職業としての助産術）」には、ナイチンゲールの助産

師教育に係る理念が明確に描かれている。追補の内容を読めば、なぜ助産師教育が必要なのか、どのような実力を備えた人材を養成しようとしたのかについて、ナイチンゲールの忌憚のない意見を聞くことができる。

以下、ナイチンゲールの言葉を引用しながら、彼女の主張を整理してみたい。

当時の英国の助産事情というものを垣間見ると、「裕福な女性は十分な資格のある女性を見つけることができずに男性に手当てをしてもらうほかなく、貧しい女性は十分な資格のある男性に謝礼を払うことができないので、資格のない女性に頼むしかない³⁸⁾。」という状況があった。これは長期にわたって英国にみられた一般的な社会現象のようだ。そこでナイチンゲールは、人の誕生の傍らにあって、分娩を手助けするのは男性ではなく“訓練を受けた実力のある産科医なみの助産師”であって欲しいと願ったのである。

「女性は誰でも、自分のお産の場合、それから自分と自分の子供たちに特有の病気の場合は、女性による手当てを受けたいと思っているのですが、それをする女性がいなくて、あるいはほとんどいないのです。助産師たちはあまりにも無知であるため、その呼び名はほとんど軽蔑語となっています³⁹⁾。」と書いているように、当時の助産師は、ナイチンゲールが改革する以前の看護師と同様に、社会的な身分や保証もなく、蔑まれていた職業であった。それゆえに職業訓練を受けた社会的に自立した助産師が必要とされたのである。

一方で、当時流行していた考えがあった。それは女性も医学教育を受けて、男性医師と同じように女性医師となるというものであった。ナイチンゲールはこの思考傾向に対して、次のように述べている。

「医学生に科学的ならびに実務的教育が、望むことのできるすべてですか⁴⁰⁾。」と問い、

「女性を医師にするよりも、つまり女医師にするよ

りももっとよいことがあります。

実務的にまた科学的に、この上なく完全な訓練をほどこすことによって、誰もが女性のものであると認める助産という医師の分野を、“男性のように”ではなく女性ができるようにすることです⁴¹⁾。」

「最高の産科医が手当てし、相談にあずかるのと同じように、正常や異常を問わず、あらゆる分娩、女性と子供の病気に際して手当てをし、かつ相談にあずかることを女性ができるようにしたいのです⁴²⁾。」

そのうえで、ナイチンゲールは助産師 (midwife) と助産看護師 (midwifery nurse) とは別々の資格であると認識していた。以下はナイチンゲールの見解である。

「私は、助産師とは、科学的かつ臨床的な訓練を受けて、必要に応じて相談を得ることを条件に、あらゆる産科医と同様、正常異常を問わずあらゆる分娩例に対処できる女性のことを指す。このような訓練を2年以内でほどこすことは無理であろう。

助産看護師とは、正常分娩であればあらゆるケースに対処でき、また異常な症例の場合には産科医を呼ばねばならないことをわきまえているように訓練された女性を指す。6か月の訓練では、女性を助産看護師以上に育てるのは無理であろう⁴³⁾。」

これが『産院覚え書・序説』を書いた当時におけるナイチンゲールの助産師に対する見解であった。この時代、かなり先鋭的な考え方をしているが、ナイチンゲールの内には鮮明な青写真がすでにあつた。実は上記のモデルは、前述したようにヨーロッパ大陸においては実現していたのである。

「私たちは、これがヨーロッパ大陸において、衛生学の実践を除いては（これは情けない欠陥です）実現されているのを知っています。

また大陸には、わが国の、あるいは他のどの国の際

立った産科医とも比肩し得る女性の教授たちが、この助産学の分野に居るのです⁴⁴⁾。」

ナイチンゲールはこうした一定のモデルを見据えて、教育制度を考案していたのが分かる。この発想は1871年当時のものなので、再度、助産師訓練学校を開設する機会があれば、彼女はこの願いをかたちにしたに違いない。

2. 助産師訓練学校の訓練システム

男性による助産から、女性による助産へと流れを変えたいことを望み、かつ高度な教育を受けた女性による助産専門職を育てようとしたナイチンゲールが抱いていた“教育制度の青写真”の一端をみてみよう。

「まず第一に、もちろんそこには産科施設がなければならず、そこでの分娩は十分に資格のある助産師たちが取り扱い、その目的のためにそこにはすでに十分な数の彼女たちがいて、臨床で助産師生徒に実際的な指導を行なうことになっていなければなりません⁴⁵⁾。」

「助産学ばかりでなく解剖学や生理学などを科学的に教える教授がいなければならず、病理学とその専門分野を教える教授も必要です。しかし何よりも必要なのは、衛生学およびその実際を教える教授です。(略) たぶん、これらの教授たちはすべて、あるいはほとんど、最初は男性であるにちがいません。たぶん、やがてそのうちに、それらの教授たちのすべて、あるいはほとんどが女性となるでしょう⁴⁶⁾。」

これはきわめて現代的な発想あり、今日的な方向性を包含した提言である。「教育機関は、生徒は1人としてこれが終了しないうちは有資格の助産師の免許を手にはできないのですが、確かに2年間はなければなりません。これは理想にすぎないでしょうか。ユートピアでしょうか。これまでにこのような教育が実行されたのを見たことはないでしょう⁴⁷⁾。」

ナイチンゲールの理想は2年間以上の高等教育であった。しかしこの理想的な教育が行われるためには、人材の確保と周囲の理解と実習の受け入れ先がなければならぬ。この壁は当時の英国にあっては、かなり厚く、強固なものであったろう。

では、実際に1861年に開設した助産師訓練学校はどのような制度であったのか。ナイチンゲールには、事業は小さく始めて大きく育てるという思考の特徴がある。彼女はそれに則り、訓練期間が6か月の「助産看護師」養成からスタートしたのであった。当初の教育システムの具体的姿を、ナイチンゲールが1861年9月にハリエット・マーティノーに宛てた手紙の中に見ることができる。

「この病院には、これまで産科病棟はありませんでした。訓練生は産科医から実地に教授を受けることになっていますが、ここの産科医がこの計画に双手をあげて賛成してくれているので助かります。男子の学生は産科の病棟に入ることが禁じられているのです。産科病棟の主任看護師はナイチンゲール基金から報酬を受けるはずですが、訓練生が放任されて誤った処置をしないように、経験豊富な助産師がこの地位につくことになっています。訓練生は総師長の直接の監督下に置かれますが、キングス・カレッジ病院の総師長は精神的にも申し分のない指導者です。訓練生は総師長の目が届くように病院内で起居することになっています。私に妹があったら、喜んでこの学校に送るでしょう⁴⁸⁾。」

この手紙でわかるように、事業の賛同者をそろえ、受け入れ先の病院を整備し、ナイチンゲール基金から資金を調達できたことで、まずは初めの一步を小さく踏み出したのであった。因みに当時の教育総責任者は、長年ナイチンゲール看護師訓練学校をも支え、同時にキングス・カレッジ病院の総師長を務めるメアリー・

ジョーンズであった。

この初期の助産師訓練システムは、ナイチンゲール看護師訓練システムと多くの類似点をもっている。病棟が教育の場であること、訓練生は病院内に起居して学ぶこと、総師長が教育の最高責任者であること、わずかな授業料で訓練が受けられること等がその類似点である。

VI. 考察

『産院覚え書・序説』全体を通して、助産事業と助産師教育に対するナイチンゲール思想の原点について、以下、3点に分けて考察する。

1. 感染症に対するナイチンゲールの見解

ナイチンゲールは、教育を受けている産科医による助産に伴う病院内出産の死亡率が異常に高いことに注目し、出産は病気ではなく、生まれてくる子ども健康なはずなのに、なぜ死亡率が高いのかという疑問を抱いた。その原因を探るなかで、〈不衛生な環境〉と〈病院構造の欠陥〉さらには〈衛生思想の欠如〉などが死亡率を高めていると確信した。そこで〈健康的な出産〉を行なうために必要な条件を打ち出していった。ナイチンゲールの指摘は決して抽象的なものではなく、図表を作成してその根拠を示し、誰もが納得のいく筋書きを作った。一般病院と産科病院は分けなければならぬと訴え、単独で分娩する家庭分娩の安全性を強調した。また、当時入手できるデータには不備が多かったが、ナイチンゲールはそれをも克服するような思考で事実を突き止め、さらに自身で有効となる統計表を編み出すなどして、後世の人びとの役に立とうとした。問題解決に向き合うナイチンゲールの思考は、現象にとらわれず物事の本質をつかむ頭脳に支えられたものである⁴⁹⁾。

さらに一連の言動は、〈感染症〉に対するナイチンゲール

ルの見解を裏書きしている。〈細菌説〉が提示される以前から、また提示された後においても、ナイチンゲールは〈感染予防〉という視点を一貫して持ち続けていた。当時は病院のみならず、社会全体が不衛生の時代であり、感染と病と貧困とは社会現象となっていた。それゆえに、予防対策としては〈衛生的な環境づくり〉〈健康的な構造物の建築〉〈住居や生活管理のあり方〉〈専門家の育成〉というテーマに絞って論じている。

この論点は、『病院覚え書』(1863)の冒頭で「病院がそなえているべき第一の条件は、病院は病人に害を与えないことである⁵⁰⁾。」と言明した内容と同様である。科学的思考を重視し、実践に根拠を求めたナイチンゲールであるが、医学者たちのように、実験や研究という領域に入っていこうとはせず、ひたすら〈衛生的な環境〉を作り、衛生思想の実践者(専門家)を養成しようとしたのである。

2. 助産思想の原点と助産師教育

ナイチンゲールは、出産という女性の人生にとって固有の営みには、女性が直接に寄り添い、母子ともに支えるべきであり、助産という仕事を男性に委ねるべきではないという考えを主張した。この点は特に医師たちからの反論にあうのだが、それは男性優位の社会構造の中では当然のことであった。ある匿名の医師と推察される男性は、「この女流作家は、お偉い女史には違いないが、所詮は女性であり、自分勝手に安直で、底の浅い分析ぶりに女性特有の性が窺われる⁵¹⁾。」と酷評した。しかしそうした批判をかわし『産院覚え書・序説』は「医学出版による扱いが認められ、英国医学雑誌とランセット誌は全面的に賞賛の声を上げた⁵²⁾。」ナイチンゲールは本書によって、出産を女性たちの手に取り戻すことに貢献したと言えよう。

さらにナイチンゲールの主張には、今日的な意義を認めることができる。それは、彼女が助産師と助産看

護師とを区別し、産科医と同様に正常異常を問わずにあらゆる事例に対処できる助産師を育てたいと考えていたことである。これがナイチンゲールの助産思想の礎であるが、そのためには、助産師教育においては科学的裏付けのある高度な知識と実践を必要とし、それらが完備した教育機関で2年以上の訓練を必要とするとして力説した。この視点は制度的には実現をみなかったが、助産師という職業が目指す方向性を考えるうえで、無視できないものである。

また、当時(1871年)、すでに「ナイチンゲール看護師訓練学校」が設立されており、その試みは軌道に乗って国内外から大きな評価を受けていたが、ナイチンゲールは助産師教育と看護師教育とを区別し、助産師はあくまでも助産師として育てるべきで、看護師教育と合体させようとはしなかった。この視点は、その後の英国の看護界をリードして今日に至っている。

3. ナイチンゲール思想の系譜からみた『産院覚え書・序説』の位置づけ

数多いナイチンゲールの著作のなかでは、『看護覚え書』の存在は大きく、その影響力も際立っている。本書は近代看護思想を隆起させ、看護師訓練学校の発展を導き、世界の看護界を牽引した。その『看護覚え書』の対象読者は、当初は女性たちであり、少女たちであり、その実践の担い手は主婦であり、看護師たちであった。つまり、ナイチンゲールは世の中の女性たちの力を活用して、社会病理現象として現れていた〈衛生問題〉や〈健康問題〉を解決したいと考えたのである。それも大げさな行動を通してではなく、ごく身近な〈暮らしを健康的に整える〉という視点をかたちにすることで、社会全体に蔓延していた感染症と対峙し、家族全体、強いては国民全体の健康を保持させようとしたのであった⁵³⁾。

『産院覚え書・序説』を紐解けば、同じ発想を見出

することができる。つまり助産という営みに女性を参加させることで、出産というきわめて健康的で明るい出来事を無事に通過させ、母子の健康と幸せを保証しようとしたと受け取ることが可能である。

ナイチンゲールは常に一貫して〈人々の健康の実現〉をキーワードにした活動を展開してきたが、助産という営みもこの思想の系譜に位置づけることができる。

結 語

1867年に助産師訓練学校が閉鎖された後、ナイチンゲール自身は再度学校を設立したいと望み、また『産院覚え書』の改訂版を出したいと願っていた⁵⁴⁾が、いずれも叶わなかった。加えて女性産科医ではなく自立した助産師の育成を目指したナイチンゲールの夢は、今日においてもなお〈課題〉として残されている。し

【文 献】

- 1) Nightingale F. (1871). *Introductory Notes on Lying-in Institutions*, Longmans, Green & Co. London.
上記の第一次資料は、現在入手不可能であるが、その内容はそっくり下記の書籍に包含されており、本研究では下記文献を参考または引用している。
McDonald L. (2005). *Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution*, Volume 8 of *The Collected Works of Florence Nightingale*. pp.249-329, Wilfrid Laurier University Press,.
- 2) Bishop. W. J. (1962). *A Bio-Bibliography of Florence Nightingale*. Dawsons of Pall Mall, London.
- 3) 金井一薫. (2010). ナイチンゲール文献研究における『A Bio-Bibliography of Florence Nightingale』の意義と、本書が日本のナイチンゲール思想研究に及ぼした影響について。東京有明医療大学雑誌, 1 (1), 13-30.
- 4) Nightingale F. (1869/1998). 金井一薫(訳). ケアの原形論(新装版). pp.236-273. 現代社.
- 5) Nightingale F. (1871/1983~1984). 薄井坦子, 小玉香津子(訳). 産院覚え書 (1) - (6). 総合看護, 18 (1) - 19 (2).
- 6) Baly. M. (1986). *Florence Nightingale and the Nursing Legacy*. pp.65-67, Croom Helm. London. New York. Sydney.
- 7) Woodham-Smith, C. (1950/1981) 武山満智子, 小南吉彦(訳). フロレンス・ナイチンゲールの生涯 (下巻). p.60. 現代社.
- 8) 前掲書 7). P.60.
- 9) 前掲書 6). P.66.
- 10) 南和嘉男. (1988). 医師ゼンメルワイスの悲劇—今日の医療改革への提言—. 講談社.

かし少なくとも、助産は女性たちの手に委ねられたのである。そして助産師たちの知識や技術は、徐々に医師たちに近づいている。今後もこの流れが途切れることはないだろう。

本論文で『産院覚え書・序説』を再考したことによって、ナイチンゲールは看護の道を切り開いただけでなく、助産の道をも拓いたという事実に触れることができた。このことによって、ナイチンゲール思想はより一層、その幅を広げ、今日的意義を深めたと確信する。

本論文では、ナイチンゲール以降の英国やヨーロッパ大陸における助産師教育の歴史、さらにわが国における助産師の歴史にみる視点や理念については、一切取り上げることができなかった。機会があれば、継続したい研究テーマである。

- 11) 夏井睦. (2009). 傷はぜったい消毒するな—生態系としての皮膚の科学. P.89. 光文社新書.
- 12) 前掲書11). p.90.
- 13) 前掲書11). p.93.
- 14) McDonald L. (2010/2015). 金井一薫(監訳), 島田将夫, 小南吉彦(訳). 実像のナイチンゲール. p.225. 現代社.
- 15) Nightingale F. (1863/1974). 湯楨ます(監修), 薄井坦子, 小玉香津子, 田村眞, 小南吉彦(訳). ナイチンゲール著作集・第二巻. p.202. 現代社.
- 16) 前掲書15). p.202.
- 17) Nightingale F. (1860/2011). 湯楨ます, 薄井坦子, 小玉香津子, 田村眞, 小南吉彦(訳). 看護覚え書. p.61. 現代社.
- 18) McDonald L. (2005). *Florence Nightingale on Women, Medicine, Midwifery and Prostitution*, Volume 8 of *The Collected Works of Florence Nightingale*. p.146. Wilfrid Laurier University Press,.
- 19) 前掲書14). p.226.
- 20) 前掲書14). p.227.
- 21) 前掲書 5). 総合看護, 18 (1). p.61.
- 22) 前掲書 5). 総合看護, 18 (1). p.61.
- 23) 前掲書14). p.280.
- 24) 前掲書 5). 総合看護, 18 (2). p.115.
- 25) 前掲書14). p.285.
- 26) ナイチンゲールの引用資料は、フランスの医師・レオン・ル・フォール著『産院：欧州の主要国における産院と家庭分娩のための慈善機関の研究』である。フォーレの著作に関しては、シンプソン卿がナイチンゲールに紹介した。
- 27) 前掲書 5). 総合看護, 18 (2). p.117.
- 28) 前掲書 5). 総合看護, 18 (2). p.117.

- 29) 前掲書5) .総合看護,18 (4) .p.105.
30) 前掲書5) .総合看護,18 (3) .pp.95-96.
31) 前掲書5) .総合看護,18 (4) . p.108.
32) 前掲書5) .総合看護,18 (4) . p.110.
33) 前掲書14) . p.287.
34) 前掲書14) . p.287.
35) 前掲書5) .総合看護,19 (1) . p.35.
36) 多尾清子.(1991).統計学者としてのナイチンゲール.pp.77-87.
医学書院.
37) 金井一薫.(2012).実践を創る 新看護学原論—ナイチンゲールの看護思想を基盤として. p.242. 現代社.
38) 前掲書5) .総合看護,19 (2) . pp.16-17.
39) 前掲書5) .総合看護,19 (2) . P.16.
40) 前掲書5) .総合看護,19 (2) . P.17.
41) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.17.
42) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.17.
43) 前掲書5) .総合看護,19, (1) . p.33.
44) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.19.
45) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.18.
46) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.19.
47) 前掲書5) .総合看護,19, (2) . P.19.
48) Cook. E. (1914/1994) . 中村妙子、友枝久美子(訳) .ナイチンゲール—その生涯と思想(Ⅱ). P.195、時空出版.
49) 薄井坦子. (2000) .『産院覚え書』にみるナイチンゲールの研究方法. ナイチンゲール研究, (6) .
50) 前掲書15) . P.185.
51) 前掲書14) . p.289.
52) 前掲書2) . p.96.
53) 金井一薫 (2019) . 新版ナイチンゲール看護論・入門. p46, 現代社.
54) 前掲書7) . P.265.